斜面に築かれる竪穴建物

～洞第２古墳群で確認された竪穴建物～

調査課　杉山　忠弘

考古学コラム「きずな」NO.13
平成 28 年６月 12 日
岐阜県文化財保護センター

＜はじめに＞

幼い頃、私は平屋の社宅に住んでいました。眺めの良い２階に自分の部屋が欲しいという夢が叶ったとき、飽きずに２階から遠くを眺めていた思い出があります。高度経済成長期の 1960 年代、都市近郊の丘陵地帯が開発されベッドタウンが造られていきました。平坦な場所の少ない丘陵地は、造成を行ってから家を建てる必要があります。眺望の開けた場所は人気も高かったでしょう。今では大型の重機もあり造成は造作もないことですが、そんな便利な機械のない時代にも斜面を造成し建物を建てた痕が見つかっています。今回は、平成 27 年度に発掘調査を行った洞第２古墳群で見つかった竪穴建物を紹介します。

＜洞第２古墳群で確認された竪穴建物＞

洞第２古墳群は岐阜市の北西部に位置する御望山(ごもやま)(標高 225m)の南東麓の緩斜面に所在する遺跡です。平成 27 年度に行った発掘調査では、７基の古墳や石室を発見しましたが、古墳以外にも縄文時代から中世にかけての遺構や遺物を確認しました。その中に弥生時代末から古墳時代初め頃にあたると考えられる竪穴建物１軒があります。「竪穴建物」とは、地面を円形や方形に掘り窪めて構築した半地下構造の建物で、「竪穴住居」とも呼ばれます。しかしこのような建物の中には「住居」以外の目的で建てられたものも見られるため、「竪穴建物」としています。

弥生時代以降、農耕文化の進展に伴い集落が形成されますが、多くは平野部の河川周辺のやや高まった自然堤防上や台地の端部などに見られます。しかし近年、丘陵の斜面地から集落跡が見つかる事例も報告されています。当センターではこれまでに関市の砂行(すぎょう)遺跡や深橋前(ふかばしまえ)遺跡などで斜面地の竪穴建物群を確認しています。

洞第２古墳群の発掘調査で確認した竪穴建物は、標高 23m ほどの緩斜面（傾斜角約 14°）に位置しています。砂行遺跡や深橋前遺跡の建物と同様に等高線と平行するように山側を掘り下げて壁を造り、その土を斜面下方に盛り整地することで、平坦面を確保しています。壁の高さは最大で 0.77m でした。幅（等高線に平行する方向の床面の長さ）は約 6m、奥行（等高線に直交する方向の床面の長さ）は斜面下方側が後世の削平によって失われているため全容は分かりませんが、残存長で約 4.5m あり、残っている３辺から、もとは方形であったと考えられます。壁際の床面には幅 0.1m、深さ 0.05m ほどの浅い溝が巡っており、柱穴２箇所や貯蔵穴と思われる土坑を１箇所確認しましたが、炉跡など火を使った痕跡は確認できませんでした。

また、平坦面を造るために盛った土砂（整地土）を取り除くと、更に 0.3m ほど人為的に掘り下げた痕跡を確認できました。この掘り下げは何を意味しているのでしょうか？

【写真１　洞第２古墳群の竪穴建物床面検出状況】

＜間取りは広い方がいい？＞

写真１は整地土を取り除く前の様子です。赤で囲った範囲に整地土が深さ約0.3m分入れられていました。整地土を取り除くと全体的に緩やかな擂り鉢状になっていましたが、写真奥の山側は垂直に近い壁となっていました。このことから、整地土の下面が最初に床面を造ろうとしていた高さの可能性が考えられます。もしかすると何らかの理由で床を広げる必要が生じたのかもしれません。山側を削りながら床を広げ、出た土砂で最初に掘った場所を埋め戻していく。こうして写真１のような間取りの広い建物を造り出したようです。

＜おわりに＞

今回確認した竪穴建物は１軒だけでしたが、周囲にも埋もれているかもしれません。『岐阜市史』によれば、隣接する洞山上(ほらさんじょう)遺跡の他、鎌磨(かまとぎ)遺跡、下城田寺(しもきだいじ)遺跡など周辺の尾根や山麓に位置する遺跡からも弥生時代後期の土器類が採集されていることから、この時代、周辺にも建物があった可能性が考えられます。濃尾平野を一望できる眺めのよい建物で、昔の人も風景を眺めたのでしょうか。